教育学卒論'90

学校のある社会とない社会

ロールシャッハ・テストによる比較研究

文理学部文科教育学4年

5606　田村康一

―目次―

序章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第1章　～ミンドロ島の山岳民族～・・・・・・・・・・・・・・・・・3
1　フィリピンの民族構成・・・・・・・・・・・・3
2　ミンドロ島・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
3　山地にすむ人々・・・・・・・・・・・・・・・8
4　ブヒッド族・・・・・・・・・・・・・・・・・10
5　調査地の選定・・・・・・・・・・・・・・・・11
6　ホゴン・リゴマ・・・・・・・・・・・・・・・15
7　バタンガン・・・・・・・・・・・・・・・・・20
8　バタンガンにおける
キリスト教の布教と学校教育・・・・・・・28
第2章　～ロールシャッハ・テストの実施～・・・・・・・・・・・36
1　テストの性格・・・・・・・・・・・・・・・・36
2　テストの実施法・・・・・・・・・・・・・・・39
3　サブジェクト・・・・・・・・・・・・・・・・41
第3章　～ロールシャッハ・テストの解釈～・・・・・・・・・・・45
1　反応の記号づけについて・・・・・・・・・・45
2　総スコア表・・・・・・・・・・・・・・・・・48
3　ホゴン・リゴマにおける
最頻的パーソナリティ・・・・・・・・・・・54
4　バタンガンにおける最頻的
パーソナリティ・・・・・・・・・・・・・・72
第4章　～文化とパーソナリティ～・・・・・・・・・・・・・・・86
1　不安、緊張と“フィリピン人”の存在・・・86
2　精神の未成熟性と素朴・・・・・・・・・・88
3　不安定な情緒・・・・・・・・・・・・・・・89
4　父親像（低地民）への恐れ・・・・・・・・90

5　未開発社会における知能の意味・・・・・・92
6　社会変化に対する適応の仕方・・・・・・・94
7　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・96
終章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・100
付録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・101

序章

２０世紀もおわりに近づいた現在、地球上から“学校のない社会”、いいかえれば近代文明とは無縁の独自の文化をもった社会、が消滅しつつある。人類の生活様式のうち、狩猟生活、遊牧生活をいとなんでいる人々は、国家の定住化政策によって消滅寸前である。また、農耕のなかでも、原始的な焼畑農耕を生業としている人たちは、狩猟民や遊牧民とおなじ運命をたどろうとしている。

このような地球規模の変容のなか、東南アジアのフィリピンにおいても、焼畑農耕民の定住化おしがすすめられている。定住化とはすなわち、独自の文化や価値体系をもつ人々を国家に統合し、文明社会の価値観でおおいつくしてしまうことに他ならない。

本論文の目的は、フィリピン共和国、ミンドロ島に住む焼畑農耕民ブヒッド族の事例から、未開社会が文明社会に統合されてゆく過程で生じる社会変化や文化変容が、人々のパ

ーソナリティにあたえる影響をあきらかにすることである。

調査の方法は、ブヒッド族における既開発の集落（学校のある社会）と、未開発の集落（学校のない社会）の両方でロールシャッハ・テストを実施し、それぞれの最頻的パーソナリティを測定、比較する。そして両者のちがいから、社会変化や文化変容がおよぼした影響をはかろうというものである。

上記の研究を通じて、統合されてゆく運命にある人々のこころをすこしでも理解するとともに、多民族国家における少数民族の教育や開発のあるべき姿について、考察してみたいとおもう。

第１章

ミンドロ島の山岳民族

１　フィリピンの民族構成

フィリピンは、北と西を南シナ海に、東は太平洋、南をセレベス海にかこまれた群島国である。総面積約３０万平方キロメートルの国土は、首都マニラのあるルソン島をはじめとする、７１０７の島々から構成されている。

これらの島々に生活する人々は、人種的には、ネグリト系、原マレー系、新マレー系の人々に大別される。また、１９７４年にフィリピン国立博物館が発行した言語地図によると、それらの人々はさらに１３４の言語グループにわけられるという。宗教的には、全人口の９３パーセント以上をしめるキリスト教系の信徒、４パーセントのイスラム教徒、そして、伝統的な土着の宗教を信仰する人々の３つにわけることができる。

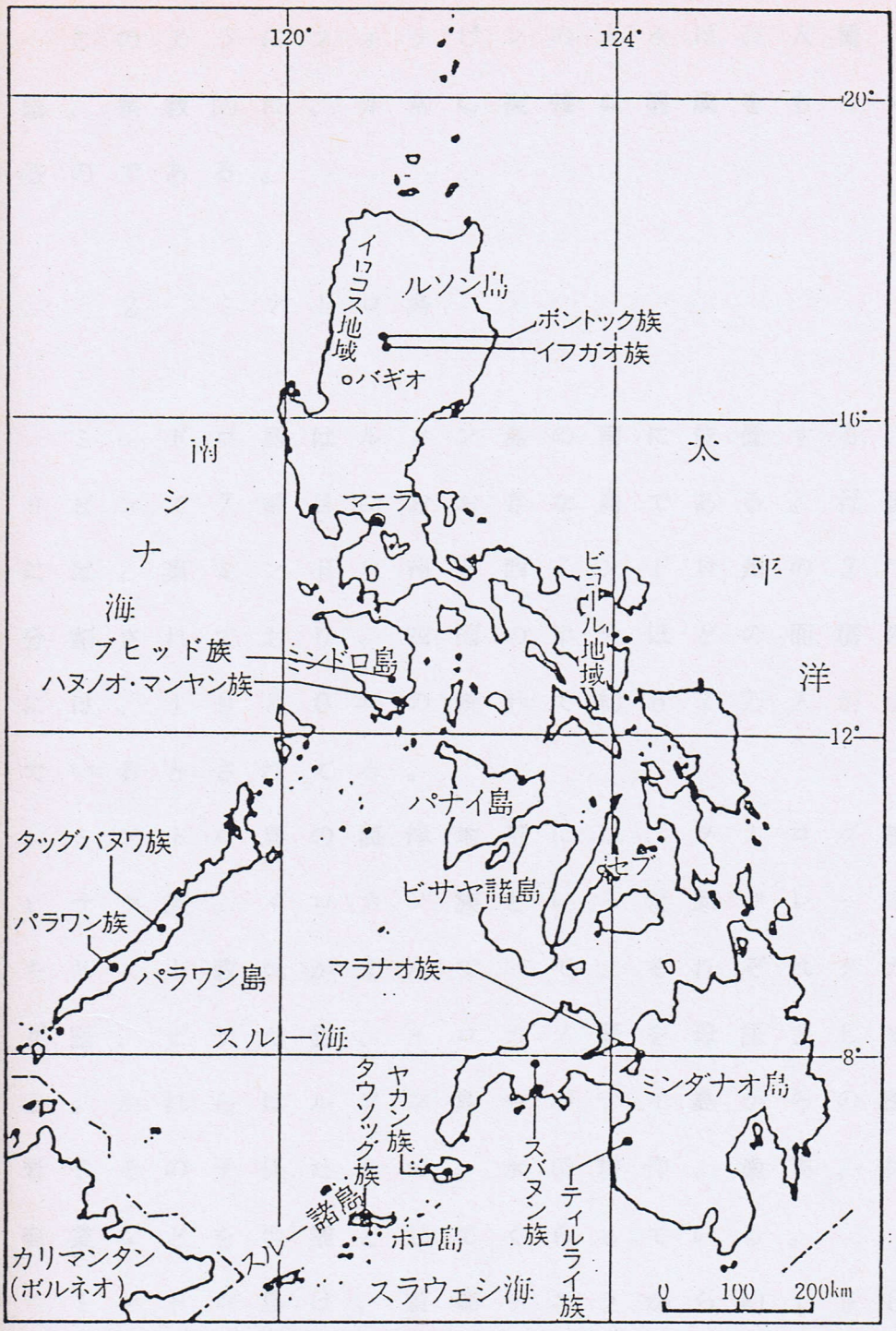

120°
124°
20°
16°
12°
8°
ルソン島
イロコス地域
ボントック族
イフガオ族
バギオ
南
シ
ナ
海
太
平
洋
マニラ
ビコール地域
ブヒッド族
ミンドロ島
ハヌノオ・マンヤン族
パナイ島
タッグバヌワ族
セブ
ビサヤ諸島
パラワン族
パラワン島
マラナオ族
スル一海
ミンダナオ島
ヤカン族
タウソッグ族
スバヌン族
ティルライ族
スル諸島
ホロ島
カリマンタン
(ボルネオ)
スラウェシ海
0
100
200km

図1　フィリピン全図

このようにフィリピンの人々は、人種、言語、宗教的に、非常に複雑な構成をもっているのである。

2　ミンドロ島

ミンドロ島はルソン島の南に位置する、フィリピンで7番目におおきな島である。行政的には、東ミンドロ州と西ミンドロ州の2つに分割されており、四国の半分ほどの面積の島には、1980年の統計で約67万人がすんでいるとされてる。

ミンドロ島の海岸地帯には、タガログ族、ビサヤ族、イロカノ族といった原マレー系のキリスト教民がすんでいて、それぞれタガログ語、ビサヤ語、イロカノ語を母語としている。かれらはルソン島やパナイ島からの移住者やその子孫たちで、水田耕作、漁業、林業、商業などを生業としてくらしている。

ミンドロ島は、首都マニラから約160キロメートルしかはなれていないにもかかわら

ず、そのアプローチはきわめて困難である。西ミンドロ州へは飛行機をつかってゆくこともできるが、東ミンドロ州へゆくには、マニラからバスと船をのりつがなければならない。参考までに、ミンドロ島への旅を再現してみることにしよう。

マニラのバスターミナルを、朝の9時に出発する。バスにのりこむさい、荷物をむりやり車内にはこびこみ、チップを要求してくるポーターや、法外な値段でカプリソーネをうりつけてくる物うりたちとの格闘に、うちかたなければならない。

出発後、3時間ちかくオンボロバスにゆられ、お昼前にバタンガスへ到着する。バタンガスは、ルソン島とミンドロ島をむすぶ定期船の発着する港町である。ついたときには腹ぺこであるが、おちついて食事をすることもできない。目的地や出港時間のちがう船の客ひきたちが、腕をぐいぐいひっぱって自分たちの船に誘導してくるのを、ふりきらなければならないからである。

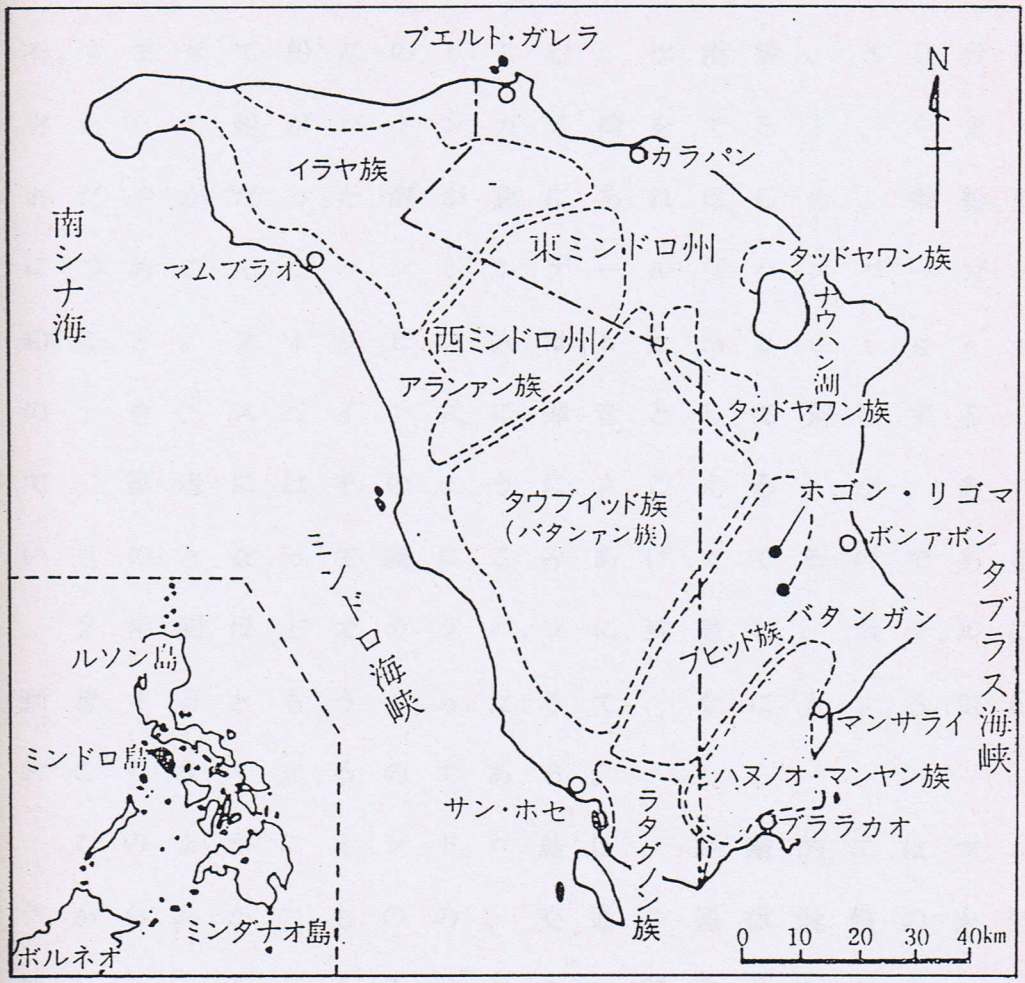


図2　ミンドロ島民族分布図

やっとのことで、東ミンドロ州の州都、カラパンゆきの切符をかい、あわただしく食事をすませて船にのりこむ。出港後、30分ほどたって船がバタンガス湾をでると、今までおだやかだった海が急にあれはじめ、乗船前につめこんだハンボルゲール（ハンバーガーのこと。フィリピン人はhamburgerのrを、スペイン式に弾音として発音するので、筆者にはそのようにきこえる）が、あついものとなって胸にこみあげてくるのである。

2時間ほどでカラパンに到着し、ホテルに到着するともうぐったりで、なにもする気がおこらなくなるのである。

このようにミンドロ島は、距離的にはマニラからちかいものの、交通や通信設備の未発達からうかがえるとおり、開発からとりのこされたまま、今日にいたっているのである。

3　山地にすむ人々

ミンドロ島の大半をしめる熱帯降雨林の山

岳地帯には、ハルコン山（２５０５ｍ）バコ山（２４８８ｍ）などの山々がそびえ、人口密度はきわめてひくい。そこには、タガログ族などの低地キリスト教民とはちがった言語、文化、宗教をもつ人々がすんでいる。かれらは「マンヤン」とよばれる原マレー系の焼畑農耕民である。「マンヤン」とは、ミンドロ島の山岳地帯にすむ少数民族を総称することばで、学者の調査によって現在７つのことなった種族（文化、言語をともにする人々のグループ）に分類されている。島の北半部には、イラヤ族、アランガン族、タジャワン族が、南半部にはタウブイッド族、ブヒッド族、ハヌノオ・マンヤン族、ラタグノン族が生活している。この他にも、まったく別の種族が奥地に存在するとの噂があるが、まだ確認されていない。

かれら山岳民族は、ミンドロ島の先住民族で、もともと島の海岸地帯にすんでいたという。しかし、あとから移住してきた新マレー系の人々によって、徐々に山地へとおいやら

れていったらしい。

4　ブヒッド族

ミンドロ島山岳民族のなかで、筆者が本論の調査対象としたのはブヒッド族である。ブヒッド族はミンドロ島東南部の山岳地帯に居住し、人口は約6000人と推定されている。

かれらはハヌノオ・マンヤン族とともに、サンスクリット系のながれをくむ、独自の音節文字を使用することでしられている。1521年のスペイン上陸以前のフィリピンでは、広範囲にわたってその音節文字が使用されていたが、スペイン人のもたらしたローマ字の影響によって、それらの大半が消滅してしまった。現在、フィリピンにおいて独自の文字をもつのは、ハヌノオ、ブヒッドのミンドロ島の2民族と、パラワン島のタッグバヌワ族だけである。

ブヒッド族にかんする民族誌的な報告は、かれらの土器についての、コンクリンの研究

が最初である。また、ハヌノオ・マンヤン族の研究でしられる宮本も、1974年に数度にわたって短期間の調査をおこない、ブヒッド族の社会組織と世界観についての簡単な報告をおこなっている［宮本、1986］。最近では、ロペス＝ゴンサガ［LOPES-GONZAGA，1983］や、トーマス＝ギブソンによって、長期のフィールドワークによる社会人類的な報告がなされている。

5　調査地の選定

筆者は、1985年8月、1986年8月、1987年2～3月および8月、1988年8月の5回にわたり、ミンドロ島をおとずれた。そのうち、1986年8月をのぞく4回、ブヒッド族の集落に滞在している。それでは、そのアプローチについて説明しよう。

前述のカラパンの船つき場から、島の南部にむけてバスがでている。バスは、ナショナル・ハイウェイとは名ばかりのガタガタ道を、

土煙をあげながらひたはしる。行く手の右側には熱帯降雨林の山なみ、左側にはタブラス海峡をのぞむことができる。山と海岸線の間にある平野部には、水田や、バナナ、椰子などのプランテーションがひろがっている。道端には、カラバオ（耕作用の水牛）がのんびりとねそべっている。

2時間ほどゆくと、ボンガボンという海ぞいのちいさな町に到着する。そこでしばらく休憩したあと、バスはふたたび、急な勾配ののぼりおりをくりかえしながらすすむ。約40分で、ボンガボン川にかかるながさ約200メートルの橋を通過し、そこからさらにゆくと、バタンガンというちいさな川にかかった橋がみえてくる。そこでバスをおり、川の上流にむかってあるく。川の両岸には、ビサヤ系開拓農民の集落が散在している。やがてそれらの集落もみられなくなり、道の両側に山がせまってくる。突然、視界がひらけ、前方にちいさな家々が密集しているのがみえる。そこが、ブヒッド族のなかでもっともおおき

な集落といわれる、バタンガンである。

バタンガンは、ボンガボンなどの町にちかいこともあって、低地フィリピン社会の影響をつよくうけている。また、フィリピン人の手によって学校や教会がつくられており、ミンドロ島の山岳民族における、文化変容や社会変化をはかるには都合のよい条件をそなえている。

バタンガンより、さらに奥地にあたるボンガボン川上流域には、“バゴン族”とよばれるグループがすんでいる。かれらはバタンガンのブヒッド族のようにまとまった集落をつくらず、山奥で昔ながらの移住生活をつづけている。かれらの居住地をおとずれるためには、ボンガボン川の徒渉をくりかえし、毒蛇や山ヒルのひそむジャングルをかきわけてゆかなければならない。雨季でいったん川が増水してしまえば、水がひくまでの数日間は、“バゴン族”にちかづくことさえままならないのである。

そのような自然上の悪条件にくわえて、“

バゴン族”の異民族との接触をきらうという習性が、かれらがいまだに山奥で伝統的なくらしをつづけている要因となっているのである。

そのような“バゴン族”のなかで、バタンガンとの比較のためにえらんだのは、ホゴン・リゴマという、ボンガボン川中流域にある小集落である。ホゴン・リゴマは、定住村をつくっていることから、厳密な意味での“伝統的なくらし”をいとなんでいるとはいいがたいが、そこより奥地へゆくと、1つの山に数軒といった単位でしか家屋が存在しないため、短期間でまとまったデータを収集しなければならないという調査の便宜上、そこを調査地とした。もちろんホゴン・リゴマには、バタンガンにみられるような学校や教会はない。

フィールドワークは、文化人類学でいう参与観察によっておこなった。『文化人類学事典』によると、「参与観察とは、調査対象となっている社会の中で暮らし、そこで営まれている社会生活に関するデータを、人々と交

際を行う過程で収集すること」［渡邊、杉島、1987：641］である。筆者はバタンガン、ホゴン・リゴマの両方に家をかり、両集落を比較することによって、かれらの文化変容、社会変化についての観察をおこなったのである。

6　ホゴン・リゴマ

ホゴン・リゴマは、世帯数40軒、人口約100人の小集落である。バタンガンのブヒッド族によると、ホゴン・リゴマの人々は「ねずみをたべ、粘土性のパイプたばこをすうバゴン族」と差別化されているが、筆者がしらべたところによると、ホゴン・リゴマとバタンガンではなされている言葉はほとんどおなじであった。ただ、ホゴン・リゴマでは、バタンガンにみられるh音がぬけ、ブヒッド（Buhid）をブイッド（Buid）、ホゴン・リゴマ（Hogon Ligoma）をオゴン・リゴマ（Ogon Ligoma）と発

音するような相違点がみうけられた。その他にも、いくつかの単語にちがいがみられたが、全体的にみると両者はおなじ言語グループだといえる。また、ねずみはホゴン・リゴマの人々の食物カテゴリーにふくまれるが、凶作などの非常時におけるバタンガンにおいても、それはおなじであった。パイプによる喫煙の習慣は、本来ブヒッド族には存在しない。これはボンガボン川の最上流域にすむ、タウブイッド族からひろまった習慣のようであるが、ホゴン・リゴマにおいては、喫煙者は人口の1割にもみたなかった（ボンガボン川上流域の“バゴン族”では、この習慣は普通にみられる）。

以上のことから、すくなくともホゴン・リゴマの“バゴン族”は、バタンガンとおなじブヒッド（ブイッド）族であるとみなしていいようである。　ホゴン・リゴマは、村のリーダー格の男性の話によると、今から10数年ほど前に、付近のブヒッド族があつまってつくった集落だという。それ以前は、現在の

“バゴン族”とおなじように、山奥で焼畑の周期にあわせて数軒単位での移住生活をしていた。かれらが村をつくるようになったわけは、あとから移住してきたタガログ族、ビサヤ族などの開拓農民に土地をうばわれないようにするための、対抗措置らしい。

ミンドロ島の先住民族であるかれらの居住地は、フィリピン政府の法律によると、ほとんどが国有地ということになっている。他島からの移住者たちは、山岳民族が土地の登記をしていないために、合法的にかれらの土地をうばうことができるのである。

ホゴン・リゴマの人々は、集落をつくり、土地を登記して最低限の自分たちの権利をまもろうとしているようにみえる。その反面、従来の焼畑による陸稲や芋、バナナの栽培にくわえ、とうもろこしなどの換金作物をつくり、町に出荷するようになるなど、徐々に低地フィリピン社会における経済活動にくみこまれるようになってきた。

しかし、かれらの生活はきわめて素朴で、

コゴン草（オオチガヤ）ぶきの簡素な高床式住居にすみ、男は昔ながらのふんどし、女は手製の巻スカートといったいでたちの人がおおい。また、カトリックの教会がないために、伝統的な精霊信仰（アミニズム）も保持したままである。そのため、フィリピンの法律上は禁止されている離婚も、実にあっさりとおこなわれる。村の親族関係をしらべていると、A氏の今の妻が、B氏の前の奥さんで、B氏はC氏の嫁さんを寝とったなど、複雑きわまりない人間関係がうかびあがってくる。かれらによると、「すきなら一緒になるし、きらいになったらわかれるだけ」ということらしい。

また、男女の初婚年令が非常にひくい。かれら山岳民族には、もともと年令という概念がないらしく、自分の年をしらないので数字は推定であるが、男で15～16才、女では12～13才になると結婚してしまうようだ。

結婚して、子供がうまれてから3～4年たつと、薪ひろいや、水くみといった仕事をま

かせられるようになる。10才前後になると、男は焼畑や狩猟、女は炊事や機おりの仕事をてつだうなど、男女の分業があきらかになってくる。また、両親が不在のときは、おさないい弟や妹の面倒をみるのもかれらの仕事である。

また、男が声がわりし、女が初潮をむかえると、両親の家のちかくにそれぞれ独立した小家屋をたてる。その家には炉はなく、食事のときは両親のもとにもどるのだが、結婚（男が女の家にすみつくか、また別の家をたて、ふたりですむようになった場合）と同時に、親から完全に独立してあらたな世帯をもうけるのである。ちなみに結婚の際には、儀礼や祝宴などはおこなわれないのが普通である。

以上がホゴン・リゴマにおける、ブヒッド族の社会生活の一端である。ホゴン・リゴマでは、経済、行政的には低地フィリピン社会のなかにくみこまれつつある。しかし、かれらの精神生活のおおくは、伝統的な慣習に支配されており、フィリピン社会の影響外にあ

るようにおもえる。

7　バタンガン

バタンガンは前述のように、ブヒッド族の集落のなかでは最大規模のものである。村のお年寄りの話によると、以前はまとまった集落をつくらずに、焼畑の周期にあわせての移住生活をしていたという。しかし、1965年に政府の国家統合委員会（CNI）の援助で、学校とカトリックの教会がつくられ、定住生活が奨励されるようになってから、バタンガン川周辺のブヒッド族たちがあつまってきて、現在のような集落が形成されたのである。

ロペス＝ゴンサガによると、1968年のバタンガンの世帯数は30軒、人口は100人であったのにたいし、1979年には世帯数94軒、人口394人と、11年間で3～4倍増加している［LOPEZ-GONZAGA, 1983］。筆者が最初におとずれた1985年

には、世帯数115軒、人口約500人であったから、その後も集落は膨張しつづけている。

元来、焼畑農耕民であるブヒッド族は、定住生活をあまりこのまないとされている。通常、1つの焼畑の利用期間は3年間であり、それがすむと他の場所に移動してゆくというのが伝統的な生活スタイルで、その移動の単位も数世帯のみである。ホゴン・リゴマの場合もそうであるが、集落をつくっての定住生活というのは、ブヒッド族本来の姿ではない。そもそも焼畑は、土地の収奪を基盤にしてなりたっているという性格上、そのような生活スタイルにはなじまないのである。

バタンガンでは、あまりにもせまい地域に人口が密集しているために、土地をめぐって深刻な問題がおこっている。村の周辺にはよい耕作地がなくなってしまい、長時間をかけてとおくの焼畑にかよう村人がふえている。それでもまだ、人口にみあうだけの土地が不足しており、他島からの移民がブヒッド族の土地に入植してきたこともてつだって、従来

１０年以上あった焼畑の休閑期間が年々みじかくなってきている。その結果、二次林が十分再生しないうちにそこを焼畑にするはめになり、森林の荒廃がすすんでいる。バタンガン周辺の山では、もはや熱帯降雨林などはみる影もなく、赤茶けた山肌をむきだしにした無残な姿がのこっているだけである。

しかし、今のところバタンガンのブヒッド族は、他のミンドロ島の山岳民族にくらべて、経済的にかなり裕福なくらしをしている。村の中心部には、フィリピン人の経営するサリサリストア（雑貨屋）が数軒たちならび、ブヒッド族相手の商売をおこなっている。村人たちは、とうもろこしなどの換金作物を町にうって得た金で、米や干し魚などの食料品をかいもとめて、ごはんの材料にするのである。このようにバタンガンでは、自給自足を目的とした農耕から、出荷して現金を得るための農耕への変化がおこっている。また、村にはとうもろこしの脱穀機械やジープニー（ジープを改造した乗合自動車）が所有されており、

各自が収穫した作物を一ヶ所にあつめて、効率よく出荷できるようなシステムができあがっている。

村の様子も、他のブヒッド族の集落とくらべると、一見してちがっていることがわかる。まず、家屋のつくりがちがう。一般のブヒッド族にみられるような、屋根をニッパヤシかコゴン草でふき、壁と床は竹をくみあわせた高床式の家屋の他に、建て増しした二階家や、床下をブロックで補強した家、そしてトタン屋根のみるからに暑苦しそうな家など、バラエティに富んでいる。

また、ふんどしや手織りの巻きスカートといった服装の人は年配者と幼少の子供にかぎられ、GパンやTシャツスタイルが主流になっている。ミンドロ島の山岳民族に共通してみられる、キンマ・ビンロウジ（石灰をまぶしたビンロウヤシの果実を、コショウ科のキンマの葉につつみ、チューインガムのように噛む。麻薬作用のある清涼嗜好品）も、「噛んでいるとロが赤くなるので低地民にばかにさ

れる」といって、敬遠されている。キンマを常用し、歯が黒くなっている人は、一部の年配者にかぎられる。

村の集会場にはバスケットボールのリングがあって、若者たちがゲームに熱中している光景を観察することができる。村の東側の広場にはカトリックの教会と小学校（4年までの分校）が、西側にはプロテスタントの教会がある。教科書やノートをかかえて登下校する子供たちや、礼拝に参加する信者たちをみていると、まるで低地フィリピン社会の集落に滞在しているような錯覚におちいってしまう。

行政的にも、バタンガンはフィリピン共和国の行政組織の末端であるバランガイにくみこまれており、ボンガボン行政区のメイヤー（区長）から、カピタン（村長）が任命されている。その他にも何人かのコンセハル（委員）が任命され、かれらを中心として、村内におけるさまざまなとりきめが話しあわれるのである。

そういったわけで、バタンガンの人々はフィリピン共和国民として戸籍登録され、かれらの土地は私有地として登記されている。現金収入もあるかれらは、収入にみあっただけの税金を毎年支払っているのである。

社会的にも、バタンガンにおける変化はいちじるしい。一般のブヒッド族社会ではまずみられない低地フィリピン人との通婚も、ここでは抵抗なくおこなわれる。村のカピタンをつとめるヤオモの娘が、低地民と結婚したのはその一例である。

また、子供が学校にかようようになったために、男女の初婚年齢が必然的にたかくなった。平均すると、男は２０才前後、女は１５～１６才であるが、男の場合は特に、学歴や財産の有無によって年齢にばらつきがみられる。余談であるが、バタンガンの若者は自分の正確な年齢をしっている。１９６５年以降に出生した者にかぎり、生年月日が戸籍に登録されているからである。

結婚にいたるプロセスも、バタンガンと他

のブヒッド族の場合ではちがっている。前にホゴン・リゴマのところで、未婚男女の家について書いたが、バタンガンにおいては未婚男子の家はあるものの、未婚女子の家は消滅してしまった。これは、一定地域に人口が集中しているために、あらたに家をたてるスペースがすくなくなってしまったことが原因とおもわれる。そのため、男が女の家に夜ばいをかけて求愛するという、従来のプロポーズがみられなくなってしまった。そのかわりに、農作業中に男からそれとなく求愛したり、女側の友人が、本人にかわって相手の男に気持ちをつたえるといった、低地フィリピン人式のプロポーズがおこなわれるようになってきた。また、結婚に際して、当事者たちの意志よりも親の意向が重視される傾向がつよまっている。いくら当人に結婚の意志があっても、親のおめがねにかなわない相手とは結婚できないのである。

周囲から結婚がみとめられると、低地フィリピン社会のように、教会での結婚式や、祝

宴をおこなうケースがふえている。そのため、婚資を負担する男性側の経済的支出が増大し、バタンガン男性の初婚平均年齢をひきあげる一因となっている。なぜなら、ある程度の年齢にたっしないと、結婚に必要な富を蓄積することができないからである。

さらにバタンガンでは、富を蓄積する人がふえるにつれて、貧富の差や、職業の分化といった現象がみられるようになった。前にもべたようにバタンガンでは、自給自足を基盤とする生活から、貨幣経済による消費生活への転換がおこなわれている。村人のなかには農業だけでなく、サリサリストアを経営する者や、ジープニー、とうもろこし脱穀機の賃貸料金で生計をたてる者などが出現してきた。また、低地フィリピン人社会で高等教育をうけ、学校の先生や看護婦の資格を身につけて村にもどってくる人などもあらわれた。しかしその反面、自分の土地をもてずに小作人になったり、フィリピン人の経営する牧場や農場で下ばたらきをする階層が出現するな

ど、ひずみも生じてきている。そのような雇われ労働者のほとんどが、ひどい低賃金にもかかわらず、苛酷な労働を強いられているのである。

このように、バタンガンのブヒッド族は、低地フィリピン社会の影響をつよくうけ、政治、経済、社会といった日常の社会生活のあらゆる面において、急激な変容を余儀なくされているのである。

9　バタンガンにおけるキリスト教の布教と学校教育

バタンガンには前述のように、カトリックとプロテスタント両派の教会があり、それぞれ信者をかかえている。ただ、村人全員が敬謙なクリスチャンというわけではない。年配の人や、働きざかりの男性には、あまり信仰心がつよくない人が多い。一般的にいって、信仰心の強さは、学歴の高さに正比例しているようだ。ブヒッド族で高等教育をうける者

の多くは、キリスト教関係のボランティア組織の援助をうけて、カトリック、またはプロテスタント系の学校にすすむからである。また、男女では、女性のほうに熱心な信者が多い。カトリックとプロテスタントでは、フィリピンの国教であるカトリックの信者の比率が圧倒的に高い。

村の東側の広場には、カトリックの教会とならんで、小学校がたっている。フィリピンの教育制度（表1参照）では、小学校は6年制であるが、ここは4年生までの分校である。先生はボンガボン行政区から派遣されてきたブエダッド夫妻2人のみで、1、2年生と、3、4年生をそれぞれ合同でおしえている。ただ、宗教（カトリック）の時間のみ、筆者のアシスタントでもある、ブヒッド族のバヤウが講師をつとめている。

子供の就学率は、一般のフィリピン農村地帯と同じく、学年を追うにしたがってひくくなっている。子供がある程度おおきくなると畑仕事や家畜の世話などをまかされ、労働力

として一家のなかで重要な役割をはたすようになるので、悠長に学校へかよわせている余裕はなくなってくる。バタンガンではそれでも、かなりの人数が4年生まで学校にかよっているが、村の分校をでたあと、町の小学校へ編入する子供はおおくはない。こうして小学校を卒業した者のなかから、さらに一部の優秀な子供にかぎり、ボンガボンやカラパンのミッション・スクールに、ボランティア組織の援助によってかようことができるのである。

バタンガン小学校の授業内容は、　　時間割（表2）のとおりである。一見して、朝の国旗掲揚セレモニーや、1年生からの社会科の導入など、フィリピン人としてのナショナリズムをうえつけるためのカリキュラムがくまれていることがわかる。国家を形成する以前から、スペイン、アメリカに統治されていたフィリピンでは、独立後、“フィリピン人”を育成することが急務だったのである。とくにブヒッド族のような少数民族に対して、

ナショナリズム教育を実施し、かれらをフィリピン国民として精神的に統合することは、多くの民族をかかえるフィリピンにおいて、国家形成上不可欠なことであった。

初期のバタンガン小学校においてはそれが高じて、タガログ族の先生が、“ガイノ”、“ヤハン”といったブヒッド族の名前を、“ウイリアム”、“グロリア”といったフィリピン風に無理やり改名させ、キリスト教徒に改宗させるなどの“事件”があったということである。

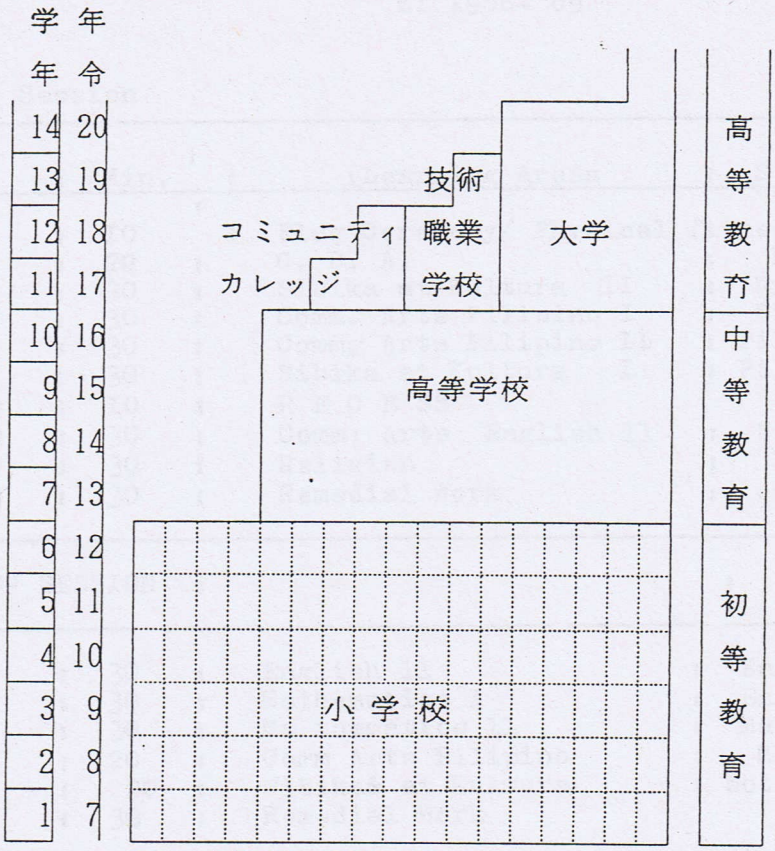
また、1年生から英語とタガログ語を学習するようになっている（表3）ため、補語である土着語（ブヒッド語）とあわせて、授業では3つの言葉を必要とし、初等教育を言語過剰なもとして、中途脱落者の増加に拍車をかけていることも見逃せない。

なお、カリキュラムのなかにある宗教（カトリック）の授業中、講師のバヤウが入室してきたところ、1部の生徒たちが退席し、授業をボイコットしている光景にでくわしたこ

とがある。退席した生徒たちはプロテスタントの信者で、他宗派であるカトリックの授業への欠席は黙認されているようだ。

以上のような、学校教育とそれに密接にむすびついたキリスト教の布教活動が、バタンガンの人々のパーソナリティにおおきな影響をおよぼしているだろうことは、容易に推測がつく。次章からは、それらの影響がどのような形であらわれるのか、パーソナリティ・テストをつかって検証してみることにする。

表1



※　破線部は義務教育

フィリピンの学校系統図

表2

DECS E_-IV DIVISION OF ORIENTAL MINDORO

BONGABONG NORTH DISTRICT
BTANGAN PRIMARY SCHOOL

C L A S S P R O G R A M
G R A D E I & II
SY 1988- 89

Morning Session

Time	Min.	Learning Areas	Seatwork
7:20-7:30	10	Flag Ceremony/ Physical fitness	Both
7:30-7:50	20	C. B. A.	Both
7:50-8:20	30	Sibika at Kultura II	Writing
8:20-8:50	30	Comm. Arts Pilipino I	Sibika&T
8:50-9:20	30	Comm; Arts Pilipino LL	Pil: I
9:20-9:50	30	Sibika at Kultura I	Pilipino II
9:50-10:00	10	R E C E SS	
10:00-10:30	30	Comm; Arts English 11	Sibika 1
10:30-11:00	30	Religion	Both
11:00-11:30	30	Remedial Work	

AFTERNOON SESSION

2:00-2:30	30	English 11	Eng. 11
2:30-3:00	30	Mathematics 1	Eng. 1
3:00-3:30	30	Ma thematics 11	Math. 11
3:30-3:50	20	Comm Arts Pilipino	Mathl
3:50-4:10	20	Sibikat at Kultura	both
4:10-4:40	30	Remedial Work	

Notes.
1. Values are taught in every subjects Area by means of integration.
2. This Class Program is flexible
3. Religion is taught twice a week. Monday and Tuesday

APPROVED:

District Supevisor

ROMEO N. BUEDAD
TEACHER

表3

学年別の教授用語と言語教科

学　年	教　授　用　語	言　語　教　科	
6	英　語 タガログ語(補助)	英　語	タガログ語
5	英　語 タガログ語(補助)	英　語	タガログ語
4	英　語 土　着　語(補助)	英　語	タガログ語
3	英　語 土　着　語(補助)	英　語	タガログ語
2	土　着　語	英　語	タガログ語
1	土　着　語	英　語	タガログ語

第２章

ロールシャッハ・テストの実施

１　テストの性格

パーソナリティを測定する心理テストの種類はきわめて多い。テストによって測られるパーソナリティの側面が異なるので、対象となる相手や理解しようとするパーソナリティの側面に応じて、テストを使いわけなければならない。

テストは、矢田部ギルフォード性格検査やＭＭＰＩ（ミネソタ多面的人格目録）などの質問紙法と、ロールシャッハ・テスト、ＴＡＴ（主題解釈テスト）、描画テスト（人物画テスト、バウムテスト、ＨＴＰＰテスト）、ＳＣＴ（文章完成法テスト）などの投影法に二分される。ブヒッド族のような"未開社会"

での調査においては、文字を媒介とする質問紙法の実施は困難である。また、投影法の文章完成法テストも、同じ理由から使用できない。よって、投影法のなかでも文字を必要としない、ロールシャッハ・テスト、ＴＡＴ、描画テストのいずれかを使用することにした。

上記３つのテストのうち、ＴＡＴは「図版が高価で入手しにくい」という経済的要因から、使用不可能となった。その結果、ロールシャッハ・テストと描画テスト（バウムテスト）の２つを平行して使うことにした。しかし、実際やってみると、絵を書くことに不慣れなサブジェクト（被検査者）が多く、バウムテストでは十分なサンプルを得ることができなかった。そのため、本論文ではロールシャッハ・テストの結果のみについて言及してある。

ロールシャッハ・テストは、本来意味のないインクのしみを、サブジェクトがどのように知覚するかによって、パーソナリティを測定する方法である。その測定法は、たとえば

「インクの1部がこうもりにみえた」という形式的側面と、「こうもりが飛んでいるようにみえた」という内容的側面から統合的にアプローチして、サブジェクトのパーソナリティをとらえようというものである。

このテストは、サブジェクトに自分の反応がもつ意味を気付かせないので、サブジェクトは緊張感や失敗感を感じることもなく、知らず知らずのうちに自分のパーソナリティを示すという長所がある。また、パーソナリティの特定の側面や意識された側面だけでなく、無意識的側面などパーソナリティを幅広くとらえ、個人の全体像をダイナミックにとらえることが可能である。

しかし、そのような曖昧で構造化されていない図版をみせられたサブジェクトが、不安や警戒心から返答に窮したり、検査者に対する不信感を抱いたりする恐れがある。したがってロールシャッハ・テストの実施においては、検査者とサブジェクト間のラポールが形成されていないと、充分な成果を得ることができ

ないといえる。

筆者は幸いにも、ホゴン・リゴマ、バタンガンの両方で、村人との友好関係を築いており、テストの実施にあたって、不都合はなかった。

2　テストの実施法

ロールシャッハ・テストは、ホゴン・リゴマ、バタンガン両集落において、1987年と1988年の2回にわたり、筆者自身の手によっておこなった。使用した言語はブヒッド語である。バタンガンには1部に英語を話す村人がいるが、そのような人々に対しても、ブヒッド語でテストを実施した。ちなみに筆者のブヒッド語の会話能力は、日常生活を送るに差し支えない程度である。実際、テストをおこなってみると、単純な反応が多かったため、複雑で抽象的な会話能力はあまり必要とされなかった。

なお、筆者が理解できない単語やフレーズ

については、現地でのアシスタントをつとめてくれたバヤウに通訳してもらった。バヤウは、ルソン島の看護学校を卒業したブヒッド族の女性で、フィリピンの公用語であるタガログ語や英語をほぼ完璧に操ることができる。彼女の協力によって、スムーズに調査をすすめることができた。

テストは日中、家のなかでおこなった。テストの手順については、高橋と北村の『ロールシャッハ診断法』［高橋、北村、1981］に従った。はじめにテストに関する教示をおこない、次に10枚の図版を順番に1枚ずつ見せ、最後に質問をおこなうという通常通りのやり方である。

なお、このテストは通常、検査者と被検査者の1対1でおこなうものであるが、ホゴン・リゴマ、バタンガンいずれの場合も、テストを“見物”しに集まってくる村人の存在が悩みのタネであった。好奇心旺盛な彼らは、筆者の制止をふりきって図版を奪い取り、テストの反応に口をはさむので、その際のサンプ

ルはすべて無効とした。また、すでに図版を見てしまった村人はその後、被検査者のリストからはずさねばならず、予定通りのサンプルを集めるのに苦労した。したがって最終的に集まったサンプルをみると、性別や年令にかなりのバラつきがみられる結果となっている。

3　サブジェクト

ロールシャッハ・テストは、ホゴン・リゴマで18人、バタンガンで22人の10代から30代の村人（年令は筆者の推定）を無作為抽出し、実施した（別表1）。両集落のサブジェクトの人数が一致していないのは、前述の理由により、人口の少ないホゴン・リゴマで、予定通り（20例）サンプルを集められなかったためである。また、ホゴン・リゴマでは男性の、バタンガンでは女性のサブジェクトが多くなっているが、これも前述の理由によるものである。

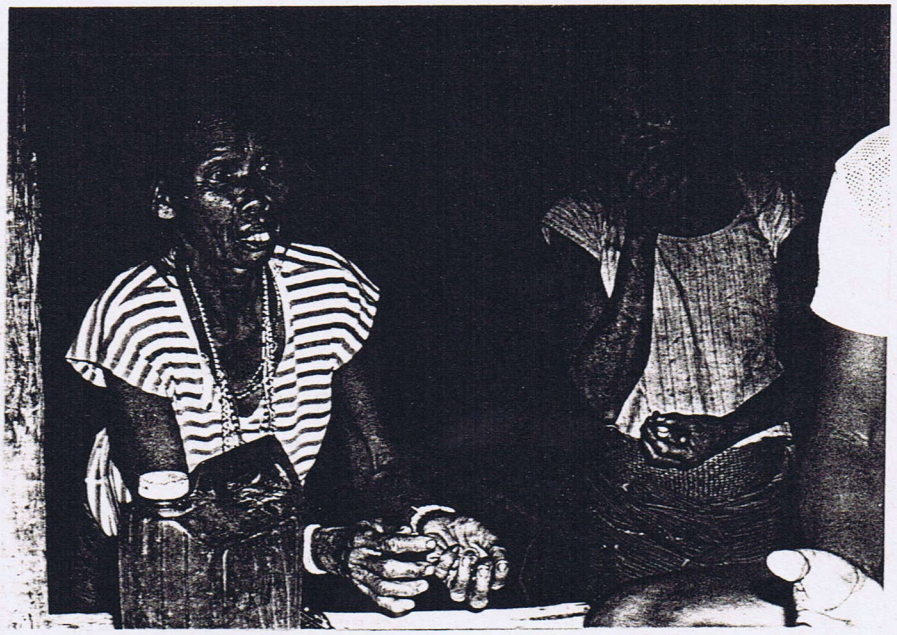
かれらのパーソナリティに性差が認められるかどうかは、総サンプル数が少ないために断定できない。よって、パーソナリティを測定するにあたって、性差は考慮しないことにした。

次にサブジェクトの年令についてであるが、前述のように、10代から30代にかけての村人を対象にした。これもサンプル数が少ないため、サブジェクトの年令とパーソナリティについての関連性については、言及しない。

サブジェクトと調査者である筆者の関係は概ね良好で、『文化とパーソナリティ』のなかで祖父江が指摘している、「テストはフィールドにおける調査者、被調査者の人間関係を損い、調査全体がスムーズに行くのを妨げる場合がある」［祖父江、1976：137］という心配はなかったといえる。ただ、ホゴン・リゴマで1件、テストを拒否されたケースがあった。筆者はその際、テストを無理強いすることはしなかったので、その村人との人間関係を損なうようなことはなかったと信

じている。

なお、テストを受けてくれた村人には全員、お礼としてビー玉をプレゼントした。ブヒッド族の間では、装飾品に使うビーズやビー玉は貴重品である。日本ではおもちゃ屋の片すみでほこりをかぶり、ただ同然の値段で売られているビー玉をえさにテストを受けてもらうなど、良心の呵責を感じたが、このプレゼント作戦が功を奏し、前述の1件をのぞいて、テストをお願いした村人全員に快く被検査者となっていただくことができた。



ビー玉を要求するブヒッド族の女性

サブジェクトの性別分布

	男	女	計
Ｈｏｇｏｎ Ｌｉｇｏｍａ	14	4	18
Ｂａｔａｎｇａｎ	8	14	22
計	22	18	40

サブジェクトの年齢分布

年令層			10	20	30	計
サブジェクト数	H	男	3	7	4	14
	B	女	0	4	0	4
	H	男	2	4	2	8
	B	女	6	7	1	14
計			11	22	7	40

反応数Ｒ分布

反応数		0	10	20	30	40	計
サブジェクト数	H	4	13	1	0	0	18
	B	1	12	6	2	1	22
計		5	25	7	2	1	40

※　ＨはＨｏｇｏｎ　Ｌｉｇｏｍａ、ＢはＢａｔａｎｇａｎの略。
　　サブジェクトの年令は筆者の推定による。

第３章

ロールシャッハ・テストの解釈

１　反応の記号づけについて

ロールシャッハ・テストでは、サブジェクトの反応をそれぞれ、領域（サブジェクトがインクのどの部分に反応したか）、決定因子（インク像が有する性質のどういう所から反応が生じたか）、反応内容（人間反応、動物反応など、サブジェクトがインク像になにをみたか）によって記号化することにしている。記号化の方式は、高橋のそれ［高橋、北村、１９８１］にしたがった。

領域にかんしては、全体反応（Ｗ）、普通大部分反応（Ｄ）、普通小部分反応（ｄ）、異常部分反応（Ｄｄ）、空白反応（Ｓ）にわけられ、そのうち出現頻度のひくいｄは、普

通部分反応としてDにふくめた。Wの下位分類記号である純粋全体反応（W）、切断全体反応（W）、部分全体反応（WD）、作話全体反応（DW）は、解釈のさいはそれぞれの有する意味を考慮したが、総スコア表では、すべてWとして集計してある。また、異常部分反応のDdは、微小部分反応（dd）、外縁部分反応（de）、内部部分反応（di）、希少部分反応（dr）に下位分類される。これもそれぞれの記号のもつ意味はことなるが、集計上すべてDdとして計算した。

決定因子は、形態反応（F）、運動反応（MFM、m）、色彩反応（C、C´）、濃淡反応（c、K）におおきくわけられる。それぞれの下位分類記号については、本論で言及する必要性はないとおもわれるので、『ロールシャッハ診断法』［高橋、北村、1981］を参照していただきたい。

決定因子の記号づけは、サブジェクトの言葉数が非常にすくなかったので、困難な作業だった。「人間」、「チョウ」といっただけ

の形態反応も、質問段階でつっこめば「歩いている人間」や、「黄色いチョウ」といった運動反応や色彩反応として知覚されていたことがわかったかもしれない。ただ全体的な反応の傾向からみて、それほど多くの決定因子が見逃されたとは、筆者はかんがえていない。

反応内容にかんしても、高橋の記号づけに全面的にしたがった。ブヒッド族では反応内容の種類がさほど多くなかったので、とくに新しい記号を設ける必要はなかった。

反応の平凡性をみる平凡反応（P）と、独創性をはかる独創反応（O）は、どのくらいの出現頻度の反応をそれぞれP、Oとするのか研究者によって意見がことなるし、対象となったサブジェクトの年令、生活環境、民族などによって頻度がちがってくる。ブヒッド族のようなロールシャッハの臨床例のないグループでは、その頻度をはかるのは不可能なので、今回は記号化しなかった。

サブジェクトがインク像によって概念化した対象の現実の姿と、インク像の構造自体が

有している形がどの程度合致するかを検討することを、形態水準の評定という。ブヒッド族における形態水準の評定は、日本や欧米の価値基準では、良（＋）、不良（－）の判断がさだめにくい。たとえば、かれらの動物反応のほとんどは、筆者がみたことのない種類のものばかりであるため、それに対して形態水準の評定をくだすことはできない。やはり一つの価値体系をもった文化においては、その文脈のなかで価値判断をおこなわなければならない。残念ながら筆者はそこまでかれらの文化に習熟していないため、現時点での安易な形態水準の評定はつつしむことにする。

2　総スコア表

以上のような立場から実施したスコアリング（記号化）を、総スコア表として各図版ごとに集計し、最頻的パーソナリティの解釈を、この表にしたがっておこなった。ただ、この表では個人的な反応のばらつきが処理されて

総スコア表

		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	R	%
R	H	24	18	21	15	20	16	18	21	21	31	205	100
	B	40	44	38	35	30	42	40	49	40	61	419	100
W	H	13	10	4	12	18	12	11	4	6	1	91	44.4
	B	28	17	13	18	27	12	22	5	8	6	156	37.2
D	H	4	5	16	0	0	1	3	16	14	30	89	43.4
	B	6	18	21	12	2	18	7	40	30	53	207	49.4
Dd	H	6	1	1	3	2	3	3	1	1	0	21	10.2
	B	6	5	4	5	1	12	10	4	1	2	50	11.9
S	H	1	2	0	0	0	0	1	0	0	0	4	2.0
	B	0	4	0	0	0	0	1	0	1	0	6	1.4
M	H	0	0	4	0	0	0	0	0	0	2	6	2.9
	B	1	2	3	0	0	0	2	0	3	1	12	2.9
FM	H	9	4	4	4	15	3	1	11	5	6	62	30.2
	B	16	4	4	5	13	0	1	13	0	9	65	15.5
m	H	1	0	2	0	0	1	1	0	2	1	9	4.4
	B	1	1	3	0	0	2	1	3	4	3	18	4.3
k	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
K	H	0	2	0	0	0	0	3	0	1	0	6	2.9
	B	0	0	0	2	0	0	7	0	0	1	10	2.4
FK	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	1	0	2	0	1	0	0	1	0	5	1.2
F	H	13	6	11	9	5	12	10	9	7	14	96	46.8
	B	18	19	24	23	15	36	20	20	8	36	219	52.3
Fc	H	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.5
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0

c	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.2
C′	H	1	2	0	1	0	0	3	0	0	0	7	3.4
	B	4	5	3	3	2	3	8	0	0	0	28	6.9
F C	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1.5
	B	0	2	0	0	0	0	0	1	1	3	7	1.7
C F	H	0	3	0	0	0	0	0	1	6	4	14	6.8
	B	0	9	0	0	0	0	0	6	21	5	41	9.8
C	H	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1.0
	B	0	1	1	0	0	0	0	6	2	3	13	3.1
H	H	0	0	6	0	0	0	0	0	0	2	8	3.9
	B	0	1	4	0	0	1	4	1	3	0	14	3.3
H d	H	0	1	3	0	0	0	1	0	0	1	6	2.9
	B	1	2	1	0	0	0	4	1	0	2	11	2.6
(H)	H	3	1	0	1	0	1	1	0	0	1	8	3.9
	B	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0.5
(H d)	H	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	3	1.5
	B	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2
A	H	14	5	5	9	19	6	6	17	10	18	109	53.2
	B	30	11	16	13	26	2	4	20	0	24	146	34.8
A d	H	1	0	1	1	0	0	0	0	1	0	4	2.0
	B	1	3	2	7	1	17	2	1	0	1	35	8.4
(A)	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.2
(A d)	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
A obj	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0

At	H	1	0	0	2	1	1	1	1	1	2	10	4.9
	B	1	0	0	1	0	0	0	1	0	1	4	1.0
A・At	H	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	1.0
	B	0	1	2	0	0	0	0	1	0	0	4	1.0
Anal	H	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1.0
	B	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0.5
Blood	H	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3	1.5
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Sex	H	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.5
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Xray	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Cl	H	0	2	0	0	0	0	5	0	4	0	11	5.4
	B	3	1	2	1	0	0	5	2	7	1	22	5.3
Expl	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Geo	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	4	1.0
Fire	H	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.5
	B	0	1	0	0	0	1	1	1	7	1	12	2.9
N	H	2	1	0	0	0	0	4	0	0	0	7	3.4
	B	0	14	2	5	2	2	7	5	6	5	48	11.4
Pl	H	1	4	3	2	0	1	0	2	3	4	20	9.8
	B	1	4	5	7	0	4	2	7	15	17	62	14.8
Smoke	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	1	0	0	4	0	0	0	5	1.2
Abst	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0

Arch	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	2	0	0	1	1	4	1.0
Art	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Cloth	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.2
Em	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Fan	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Food	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Letter	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Mask	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Obj	H	0	1	0	0	0	6	0	0	0	0	7	3.4
	B	0	3	0	0	0	11	1	2	1	2	20	4.8
Stain	H	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1.0
	B	0	2	2	0	0	0	3	4	0	3	14	3.3
Travel	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0.5
	B	2	0	0	0	0	1	2	2	0	0	7	1.7
Weapon	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
Other	H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0
	B	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0

いないままになっている。また、総スコア表の集計は主要反応のみでおこない、付加反応は省略した。そのため、厳密な意味での最頻的パーソナリティが測定されるとはいいがたい。しかし、筆者の研究の目的は、それぞれの集落におけるパーソナリティの大体の傾向をつかみ、比較することにあるので、多少の個人的ばらつきや付加反応は、考慮しなくてよいとかんがえている。

最頻的パーソナリティの測定とは、ホゴン・リゴマ、バタンガンそれぞれの集落の成員に共通してみられる特徴を、あたかも1人の人間のパーソナリティのようにえがきだすことである。本来1人の人間についてのパーソナリティを測定する手段であるロールシャッハを、集団の最頻的なパーソナリティをしるために利用することの是非や妥当性は、筆者にはわからないが、他に方法がおもいつかないのでこのまま用いた。

なお、解釈法は『ロールシャッハ診断法』にしたがった。なお、比較の対象として日本

人の正常成人における数値（高橋らのデータによる）を引用してある。文中、注釈なく“正常成人”とあるのは、すべてその平均値である。

3　ホゴン・リゴマにおける最頻的パーソナリティ

（1）　各図版の性質と拒否（ショック）

図版をサブジェクトにみせてから、感想ではなく、記号化できる反応がはじめて出現するまでの時間を、RT（始発反応時間）とよぶ。

Ⅰ図におけるRTのおくれ（正常成人12.0秒に対して27.5秒）と拒否→テストに対する疑惑や不安、未知の課題をさけようとする態度をあらわしているとかんがえられる。精神性的に未成熟、経済的無力感や仕事がうまくいかないと感じている人に生じやすい。

Ⅱ図における拒否（2）→情緒が不安定な人や性的な葛藤をもつ人は、この図版を適切

ＲＴ（始発反応時間）［秒］

図版		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ
最小	H	4	5	2	4	2	3	7	5	1	2
	B	3	5	2	4	2	3	2	2	2	2
最大	H	122	77	175	99	46	95	51	81	98	55
	B	117	42	51	96	70	42	30	18	41	24
平均	H	27.5	30.8	36.9	29.2	11.1	32.2	24.3	25.5	25.6	19.4
	B	19.4	17.7	12.6	28.6	8.9	18.1	10.2	8.6	14.1	10.9
計		23.0	23.2	23.1	28.9	9.9	24.2	15.9	16.0	19.2	14.8

拒否

図版		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	計
H	人数	1	2	2	4	0	2	3	1	1	0	16
	(%)	6.3	12.5	12.5	25.0	0.0	12.5	18.8	6.3	6.3	0.0	100
B	人数	1	0	0	1	0	2	0	0	1	0	5
	(%)	20.0	0.0	0.0	20.0	0.0	40.0	0.0	0.0	20.0	0.0	100

※　各図版ごとの数字は、その図版を拒否した人数であり、拒否の合計を100%ととしてその割合を下段に示した。

に処理できないでショックをしめしやすい。

Ⅲ図におけるＲＴのおくれ（正常成人１２．３秒に対して３６．９秒）と拒否（２）→情緒刺激をあたえられた場面において、徐々に適応していく能力を欠く。子供のころからきびしく取り扱われ、父親を恐れている人に生じやすい。

Ⅳ図におけるＲＴのおくれ（正常成人１６．１秒に対し、２９．２秒）と拒否（４）→恐ろしくてきびしい男性の権威像（父親など）と適切な関係をもてず、また経済的な面や性的適応が不十分であり、不安感や無力感をもつ人に生じやすい。

Ⅵ図におけるＲＴのおくれ（正常成人２１．１秒に対し、３０．８秒）と拒否（２）→性についての神経症的葛藤をあらわす。自分の性の役割に対して不安を抱いている人に生じやすい。

Ⅶ図における拒否（３）→精神発達が未成熟、退行した状態のものである可能性がある。また、母親との葛藤もかんがえられる。

（２）　反応数、反応時間

ホゴン・リゴマにおけるＲ（反応数）の平均は１１．４個で、高橋の資料で２１～３９個の範囲内にあるとされている日本の正常成人とくらべると、はるかにすくない。この原因は、サブジェクトに自信がなかったり不安への耐性がひくいために、慣れない場面をさけようとしがちな傾向があることによる。Ｒのすくなさは精神活動の不活発さや生産性の減少に関連し、またサブジェクトが抑うつ気分であったり、テストを心的圧力のつよい状況とうけとって緊張したときも、Ｒはすくなくなる。

全図版の平均ＲＴは２６．３秒で、正常成人の平均１８．０秒にくらべてかなり多くなっている。これはホゴン・リゴマの人々が、新しい場面を処理する能力に劣ることを意味しているとおもわれる。

（３）　領域

	正常成人	ホゴン・リゴマ
W％	41～66％	44.4％
D＋d％	29～51％	43.4％
Dd％	0～4％	10.2％
S％	0～4％	2.0％

全体反応Wの44.4％は、日本人の平均とくらべるとややすくないが、20～30％の範囲にあるといわれているアメリカの平均よりもかなり多い。ただ、Rがすくないので、この場合のWはサブジェクトの緊張状態をあらわしているとかんがえられる。

また、M（人間運動反応）との関係でかんがえると、W：M≒15：1となり、Wにくらべて Mが極端にすくないことがわかる。この現象は、本質的に潜在能力がひくいにもかかわらず、要求水準がたかい人に多くみられる。

普通部分反応のD＋d％は、43.4％と、やや多くなっている。これもRがすくないことから、D＋d％の多さが内気、小心で抑う

つ的な気分をあらわすことがかんがえられる。

異常部分反応のＤｄの割合は、かなり高い。Ｄｄの高い出現率は、不安や緊張のつよい人が、それをやわらげるために、たいして意味のないささいなことに関心をもつことに関係するといわれている。

空白反応のＳ％は、多くも少なくもなく、とくに問題になることはないとおもわれる。

（４）　決定因子

形態反応Ｆ％は、正常成人４４．６％に対して、４６．８％と普通の値をしめしている。

人間運動反応のＭは、全図版で１８人中６例が答えられたのみで、非常にすくない。Ｍを生じない原因としては、サブジェクトのひくい知能、想像力、洞察力の欠如、そして現在の欲求のままに行動しやすいことなどがかんがえられる。また、両親との関係がのぞましくないものや、社会的相互活動への関心のないものにもＭは生じにくい。

パーソナリテイの原始的で本能的な層を反

映しているといわれる動物運動反応のＦＭは、計６２個、１人あたり平均３．４個出現している。正常成人の平均は４．２個で、それにくらべると若干すくない。しかし、Ｍとの関係でみると、ＦＭのほうがかなり多くなっている。そのようなサブジェクトは自己本位で自分の欲求をただちに充足しようとする未成熟性や、責任感、現実感覚の欠如などがめだってくる。

無生物運動反応のｍは、平均０．５個で、０～１の範囲にある正常成人とおなじであるため、とくに問題はない。

色彩反応は、平均でＦＣ０．２（１．６）、ＣＦ０．８（１．９）、Ｃ０．１（０．１）個であり、（）内の正常成人の平均とくらべると、ＦＣ、ＣＦがともにすくなくなっている。ＦＣのすくなさは、情緒的態度が社会化されておらず、他人と適切に妥協できない人であることがかんがえられる。色彩反応間の関係でみると、ＦＣ、Ｃにくらべて ＣＦの割合が多い。このようなサブジェクトは、自己

に関心をむけ、他人の愛情をもとめ、不快なことをさけようとし、理性よりも感情にはしりやすい。

また、

$$\frac{FC+2CF+3C}{2}$$

の公式によってあらわされるSumCは、約1で、正常成人の平均2.9よりひくく、環境からの情緒刺激に対する反応がよわいとかんがえられる。

さらに全色彩図版であるⅧ、Ⅸ、X図への反応の比率

$$\frac{Ⅷ、Ⅸ、X}{R}\times 100$$

も、SumCとおなじように、環境からの情緒刺激に対する反応のしかたをあらわしているが、これは35.6%と正常成人の平均34.6%にほぼ等しかった。

無彩色反応は出現率がひくいため、FC′、C′F、C′をまとめてC′として表示した。C′の平均は0.4個（正常成人0.7）であった。ただ、黒色無彩色反応が白色無彩色

反応にくらべて多いので、それが抑うつ気分や内気、受動性など圧迫された感情をあらわすこともかんがえられる。

形態材質反応のＦｃは、全体で１個しか出現していない（正常成人１．５）。Ｆｃの欠如は、なんらかの形で愛情欲求をあらわすことを拒否したり、抑圧したりしている人にみられる。材質形態反応のｃＦと、純粋材質反応のｃは、総スコア表にｃとしてまとめた。出現率はそれぞれ０％で、とくにふれることはない。

通景反応のＦＫは全体で０（正常成人平均０．７）で、まったくみられない。これは、洞察力、内省力や客観的に自分を評価できる能力の欠如をしめしているとおもわれる。拡散反応のＫＦ、Ｋはふつう出現しないので、Ｋとしてまとめた。これは全体で６、平均０．３（正常成人平均０．２）なので、とくにふれる必要はない。

準立体濃淡反応のＦｋ、ｋＦ、ｋも出現することはすくないので、まとめてｋとしてあ

らわした。ホゴン・リゴマでは、kはまったく反応されなかった。

ロールシャッハ・テストでは人間運動反応と色彩反応の比率を体験型としてあらわし、サブジェクトの物事の体験のしかたをとらえることができる。ホゴン・リゴマの場合、Mの平均が0.3で、SumCが1なので、収縮型であるとみなすことができる。収縮型の人は、パーソナリティが硬く、内面生活が空虚であり、現実への積極的な関心がなく、感受性もにぶく紋切り型の態度によって行動する人である。この型の人は過去の経験において豊かな情緒生活をもった経験がすくなく、自発性をもたずに成長していることが多く、その興味の範囲はかぎられており、生活空間がせまいのが普通である。

（5）　反応内容

人間反応のH％は、3.9（正常成人16.0）で、非常にすくなくなっている。また、RとH％のあいだには相関関係があり、不安

や抑うつ気分によってRがすくない場合、人間反応はほとんど生じなくなる。このようなサブジェクトは、他人への関心を欠いて人間関係をさけようとしたり、他人への敵意を有していたりする。また、自分の感情や欲求を意識できず、それを他人との関係において適切に調節していけないことが多い。

人間反応のHと、人間部分反応のHdの合計は平均0.8個（正常成人5.0）で、かなりすくない。

非現実人間反応の（H）と（Hd）の合計は平均0.6個（正常成人2.4）で、これもすくない。（H）、（Hd）の具体的な内容は、ラバン（ブヒッド語で悪霊の意）、アスワン（タガログ語で吸血鬼の意）、イナバイ（ブヒッド族の創世神話にでてくる、竹の中から生まれた女性）、死体などであった。このうち、もっとも多かったのは、（H）をこたえたものの38.5%にみられた死体であった。このような（H）をこたえるサブジェクトは、敵意や嗜虐性を抑制していることが

かんがえられる。

動物反応のA％は、53.2（正常成人38.5）で、たかくなっている。A％のたかいサブジェクトはMがすくなかったり、Rがすくないことが多く、かれらが創造性や自発性を欠き、不安や抑うつ気分がつよいことを示しがちである。また、知的活動が不活発で、紋切り型の思考をする人や、自分の行動力に対して洞察力をあまりもてない人もA％がたかい。かれらは自分が属している集団の慣習を受け入れていくが、内省力を欠き、将来のことをあまりかんがえない人であることが多い。

つぎに、かれらの答えた動物反応を分類し、表に示した。

動物反応表（ホゴン・リゴマ）

哺乳類	鳥類	爬虫類	魚類	昆虫	その他
サル	タカ	ワニ	うなぎ	Ibo	カエル
ネズミ	Manok	トカゲ	魚	Alamayay	カニ
ネコ	(鳥)	カメ		Opsik	
ブタ	Abirau			チョウ	
ジャコウ	(大コウモ			シジミチ	
ネコ	リ)			ョウ	
イタチ	Banog			Titibud	
イヌ	(小コウモ			Bayang	
ヤギ	リ)			Ogbunid	
Tupati	Balauis			Baginawa	
Akdat	Sisit			Fangagao	
				Titit	
				毛 虫	
				Liyon	
				Tilato	
				Tayayon	
				クモ	

以上のように、計３９種類の動物反応がみられた。表中、ローマ字で表記してあるのはブヒッド語の名称で、筆者のしらない動物である。分類したなかでは昆虫、次いで哺乳類の出現頻度が高かった。個別にみるとチョウ（シジミチョウ）、ネコ（ジャコウネコ）、コウモリ、Ｔｉｔｉｔ（昆虫）、ネズミ、イヌ、カエルの順に出現率が高かった。

解剖、性に関する反応では、解剖反応Ａｔの出現率が４．９％（正常成人２．１）と、高くなっている。Ａｔは、身体の機能や統合についてのつよい関心をもち、外界への関心がすくないという自己陶酔をあらわすといわれる。ただ、ミンドロ島の少数民族には、人が死ぬと死体をのこして家をとびだし（死体には悪霊がとりついていると信じられているため）、死後しばらくしてから家にもどって死体をはこびだしたり、土葬した死体を１年後に掘りおこす“骨掘り儀式”をおこなう習慣がある。そのような“未開”社会で、文明社会における解釈が通用するかどうかは、疑

問である。

また、肛門反応のＡｎａｌは、めったに出現することがなく、出現した場合は性への関心の抑制や、同性愛の指標としてとりあげられるが、ホゴン・リゴマでＡｎａｌをこたえたサブジェクトは、筆者のしるかぎりではそのような趣味の人ではなかった。ここでは、ふんどし一丁の服装があたりまえなので、常に人目にさらされる運命にあるお尻が、上記のような性的な意味を有しているとはかんがえにくい。

血液反応のＢｌｏｏｄは、外界が自分をおびやかすと感じて、情緒を適切に統制できない人に生じやすいといわれている。しかし、家畜や狩りでしとめた獲物を自らさばいているかれらにとって、血をみることは日常茶飯事であり、Ｂｌｏｏｄが出現したからといって、それが特別な意味をもつとは断定できない。

性反応のＳｅｘは、全体で１個しか出現していない。結婚前のフリーセックスが社会的

にみとめられ、日常会話のなかでも性に関する話題にタブーのないホゴン・リゴマにおいて、Ｓｅｘが１個というのはすくない気がする。このＳｅｘの意味も、性に関する本音と建前のある日本のような社会と、おおらかで開放的なホゴン・リゴマを同列にならべて比較するのはナンセンスである。

エックス線反応のＸｒｅｙにいたっては、エックス線やレントゲンの存在をしらないかれらにとって、こたえられるはずもない。

雲反応Ｃｌと煙反応Ｓｍｏｋｅは、拡散反応ＫＦと結合して不安をしめすことが多い。一般にＣｌは正常成人にも生じるが、Ｓｍｏｋｅは児童や低知能者に出現しやすい。ホゴン・リゴマではＣｌはみられるが、Ｓｍｏｋｅは反応されてなかった。

爆発反応のＥｘｐｌは、犯罪者に多く出現し、はげしい敵意と、つよい情緒をともなう心理的緊張を有し、これを統制できないで破壊的行動をすることを恐れていたり、実際に行動化する傾向をあらわすといわれる。めっ

たに犯罪のおこらないホゴン・リゴマには、そのようなサブジェクトは存在しなかった。

地図反応のＧｅｏは、予想どおり０であった。かれらの生活においてなんの意味もなさない地図など、反応されるはずはない。

火反応のＦｉｒｅはＢｌｏｏｄとおなじように、統制できないつよい情緒の存在をしめすとかんがえられている。これは全体で１個しか反応されなかったので、とくに問題はないとおもわれる。

自然反応のＮは、３．４％（正常成人４．１）であった。そのなかでは、「山」をこたえるサブジェクトが多かった。「山」は、自分よりもおおきく、力強い人と自分自身をくらべて劣等感をもつ人に生じやすく、その対象は父親であることが多い。

植物反応のＰｌは、９．８％（正常成人７．２）で、やや多くなっている。Ｐｌは成人よりも児童に、男性よりも女性に多く生じ、幼児性、受動性、依存性などをあらわすとかんがえられる。

以下、その他の反応内容で目立つのは、物体反応Ｏｂｊが３．４％（正常成人６．３）で、Ⅵ図のＷに「ギターラ（ギターをまねてつくった手製の弦楽器）」が多かったこと、情緒への統制を欠いた病的な指標であるインク反応Ｓｔａｉｎが出現した（全体で２個）ことぐらいである。

（６）　まとめ

以上の要因から、ホゴン・リゴマの最頻的パーソナリティをまとめてみた。

かれらは内気で小心者であり、日常生活においては不安や緊張状態がつよく、抑うつ気分である。また、不安や緊張をやわらげるために、ささいなことに関心をもつ傾向がある。

精神的には未成熟で、幼児性や退行性がみとめられる。そのため、現在の欲求のまま行動し、理性よりも感情に走りやすい。また、精神活動が不活発で、生産性がひくい。

情緒は不安定で、外界からの情緒刺激に対する反応がよわく、うまく適応できない。

両親、とくに自分よりもおおきく、力強い存在である父親像を恐れ、劣等感をもっている。また、経済、性的にも無力感をかんじ、自信のもてない人である。

知能はひくく、想像力、洞察力、内省力を欠き、自分を客観視できない。また、紋切り型の思考をもち、創造性を欠く。そのため、新しい場面や状況を処理する能力がない。また、受動的、依存的で自発性を欠く。

他人や社会的相互活動への関心はあまりなく、自己本位である。ただ、他人への敵意を有していても、その感情を抑制できる人である。

4　バタンガンにおける最頻的パーソナリティ

(1)　各図版の性質と拒否(ショック)

ホゴン・リゴマとくらべると、全体的にRT(始発反応時間)がはやくなっている。これはバタンガンの人々が、ホゴン・リゴマの

人々よりも、あたらしい場面や状況を処理する能力を有しているといえる。ただ、Ⅳ図においてのみ、ＲＴ平均が２８．６秒と２９．２秒のホゴン・リゴマとほぼおなじ数値をしめしている（正常成人１６．１秒）。これより、バタンガンのブヒッド族も、父親などのきびしい男性の権威像と適切な関係をもてず、経済、性的適応が不十分で、不安感や無力感をもっていることがうかがえる。

また、Ⅵ図を２人が拒否した。このショックは、性についての神経症的葛藤をあらわす人にみられる。

（２）　反応数、反応時間

バタンガンにおける反応数Ｒの平均は１９．０個で、１１．４個のホゴン・リゴマとくらべてかなり多くなっている。正常成人の平均３１．７個よりはすくないものの、バタンガンの人々はホゴン・リゴマよりも慣れない場面を処理する能力があり、精神活動、生産性ともに活発であるということができる。

全図版の平均ＲＴは１４．９秒で、２６．３秒のホゴン・リゴマはもとより、１８．０秒の正常成人とくらべてもはやい。これは前述のとおり、あたらしい場面を処理する能力を有していることを意味するが、幼児や軽躁気分のサブジェクトのＲＴもはやい。

（３）　領域

領域は、ホゴン・リゴマとバタンガンではほとんどおなじような数値をしめしている。ただ、Ｗ％とＤ＋ｄ％の割合が逆になっており、バタンガンではホゴン・リゴマにくらべて、アメリカの値にちかくなっている。

Ｍ（人間運動反応）とＷの関係をみると、Ｗ：Ｍ＝１３：１である。これは、本質的に潜在能力がひくいにもかかわらず、要求水準がたかい人にみられる現象である。

Ｄ＋ｄ％はホゴン・リゴマや正常成人にくらべて多い。これは物事を分化し、具体的にみることに関心をもっていることをあらわしている。からは知能を実際的、日常的、常

識的に用い、どちらかというと現実的、具体的、経験的に思考する人である。

Ｄｄ％はホゴン・リゴマとおなじく、たかくなっている。バタンガンの場合はＲがすくなくないので、Ｄｄの多さが、あたえられた問題や生活場面に無関係で、非本質的なものにこだわり、ささいなことへの関心がつよいことを意味しているとおもわれる。

Ｓ％については、とくに言及することはない。

（４）　決定因子

形態反応Ｆ％は、５２．３％で、ホゴン・リゴマ、正常成人の値をともに上まわっている。Ｆ％の比率がたかいのは、自分の個性にしたがって行動するよりも、表面的な形式にならおうとし、感受性や自発性を欠くサブジェクトであることが多い。

人間運動反応のＭは、全図版で２２人中１２例答えられ、ホゴン・リゴマとおなじく２．９％の出現率であった。Ｍの出現率の低さが

意味するものは、ホゴン・リゴマの場合とおなじであるとおもわれる。

動物運動反応のＦＭは、計６５個、１人あたり平均３．０個出現している。これはホゴン・リゴマの場合とあまりかわらないが、決定因子全体の割合からみると、総反応数Ｒの多いバタンガンのＦＭ％（１５．５％）は、ホゴン・リゴマ（３０．２％）の約半分である。

無生物運動反応のｍは、平均０．８個で、とくに問題はない。

色彩反応は１人あたりの平均がＦＣ０．３、ＣＦ１．９、Ｃ０．６個である。これをみると、ＦＣが少なく、ＣＦは正常成人とおなじで、Ｃは多くなっている。ＦＣの少なさは、情緒的態度が社会化されていなく、他人と適切に妥協できないことに関連する。Ｃは情緒の著しい未成熟性や、統制力を欠いた衝動性をあらわし、正常成人にはめったに出現しないといわれている。Ｃのなかでも、バタンガンで多かったのは色彩名称反応のＣｎであっ

た。Ｃｎは正常成人に出現することはなく、脳器質症患者や、精神分裂病者、精神遅滞者に生じやすい。また、幼児が色の名前をおぼえた知的成就感をほこる指標ともかんがえられる。ただ、Ｃｎは特定のサブジェクトに集中してみられた。よって全体的にみると、Ｃｎの多さはそれほど気にしなくてもよいとおもわれる。

ＳｕｍＣは約２．５で、ホゴン・リゴマとくらべると、環境からの情緒刺激に対する反応はよわくないとかんがえられる。

全色彩図版のⅧ、Ⅸ、Ⅹ図への反応の比率は３５．８％で、正常成人の平均にほぼ等しかった。

無彩色反応のＣ′の平均は１．３個で、ホゴン・リゴマ（０．４）、正常成人（０．７）にくらべて多く、黒色Ｃ′と白色Ｃ′では、黒色Ｃ′の出現率がたかい。バタンガンでは黒色Ｃ′が出現しても、色彩反応がかなり生じているので、それが抑うつ気分や内気、受動性など圧迫された感情をあらわすとは必ず

しもいえない。

形態材質反応のＦｃは、全体で０個である。ホゴン・リゴマの場合とおなじように、Ｆｃの欠如は、なんらかの形で愛情欲求をあらわすことを拒否したり、抑圧したりしている人にみられる。ｃＦとｃはあわせて１個で、とくに問題はない。

通景反応のＦＫは平均０．２個である。ＦＫがまったく出現しなかったホゴン・リゴマにくらべて、バタンガンの人々は洞察力、内省力や、客観的に自分を評価できる能力をもつ成熟性を有している。ＫＦ、Ｋの出現率はホゴン・リゴマ、正常成人とあまりかわらないので、とくにふれない。

準立体濃淡反応のＦｋ、ｋＦ、ｋは、ホゴン・リゴマとおなじく、出現率０％であった。

体験型は、人間運動反応Ｍの平均が０．５個で、ＳｕｍＣが２．５なので色彩型とみなすことができる。色彩型の人は現実からの刺激に敏感に反応し、模倣的で紋切り型の知能を示すことが多く、情緒が不安定で自分の感

情を外部に表現しやすく、予測できない行動にはしりやすい。しかし色彩型で適応した人は、環境からの刺激を適切にうけとり、他人や外界に対するあたたかい関心と順応性をもち、外界に見出した目標にむかって適切なはたらきかけをしていくことができる。

（５）　反応内容

人間反応Ｈ％は３．３で、非常にすくない。Ｈ％は、不安や抑うつ気分を示唆したり、他人への関心を欠いて人間関係をさけようとしたり、他人への敵意を有しているものにみられる。また、自分の感情や欲求を意識できず、それを他人との関係において適切に調節していけないことが多い。ただ、Ｒがすくなくないので、バタンガンの人々が不安や抑うつ気分だということはないといえる。

Ｈと、人間部分反応Ｈｄの合計の平均は１．１個（ホゴン・リゴマ０．８、正常成人５．０）であった。

非現実的人間反応（Ｈ）と（Ｈｄ）の合計

は、全体でわずか3個しか出現しておらず、ホゴン・リゴマよりもはるかにすくなくなっている。その内容は、ラバン（悪霊）、アスワン（吸血鬼）であった。（H）のすくなさは、空想力の欠如をしめしているとおもわれる。

動物反応のA％は、34.8で、ホゴン・リゴマの53.2、正常成人の38.5よりもひくいが、A％とAd％の合計は43.2で、正常成人（42.7）とほぼ等しい。

つぎに、それらの動物反応を分類し、表に示した。

バタンガンでは36タイプの動物反応が出現した。ホゴン・リゴマにみられなかった現象として、ライオン、トラなどの日常の生活空間には存在し得ない動物が出現したことが注目される。出現頻度は、チョウ、コウモリ、イヌ、サル、クモ、ネズミ、鳥の順に高かった。

解剖、性に関する反応では、解剖反応Atの出現率がホゴン・リゴマよりひくくなって

動物反応表（バタンガン）

哺乳類	鳥類	爬虫類	魚類	昆虫	その他
サル	タカ	ワニ	えい	チョウ	カニ
ネズミ	Manok(鳥)	ヘビ	魚	クモ	しっぽの
ブタ	Habirau			ハチ	ある動物
ジャコウ	(大コウモ			毛虫	羽のある
ネコ	リ)			ゴキブリ	動物
ネコ	Banog			Balangan	赤い動物
イヌ	(小コウモ			アリ	動物
ウサギ	リ)			虫	貝
ライオン	アヒル			Balobalo	
トラ	フクロウ			Kabitan	
				Tigasau	

椰子の汁を“一気”する
ブヒッド族の子供

いる。

その他では、ホゴン・リゴマにみられた血液反応のＢｌｏｏｄ、性反応のＳｅｘが出現率０％であった。

雲反応Ｃｌは、ホゴン・リゴマとほぼ同じ出現率となっている。しかし、ホゴン・リゴマにはみられなかったＳｍｏｋｅが出現している。Ｓｍｏｋｅをこたえたサブジェクトのパーソナリティは未成熟であり、理解力のひくさや抑うつ的気分をあらわすとかんがえられる。

地図反応Ｇｅｏは、全体で４個（ホゴン・リゴマ０個）出現している。Ｇｅｏは依存欲求がみたされないことを示し、社会的に孤立して不適応感を生じている人にみられる。

爆発反応のＥｘｐｌは、ホゴン・リゴマと同じく０％であるが、火反応Ｆｉｒｅは、ホゴン・リゴマが全体で１個しか反応されなかったのに対し、１２個と多くなっている。Ｆｉｒｅは統制できないつよい情緒の存在をしめすとかんがえられている。

自然反応Ｎは、１１．４％とかなりたかくなっている。Ｎは知的な争いや批判をさけることに結びつくといわれている。

植物反応Ｐｌは１４．８％で、これも出現率がたかい。バタンガンによくみられるＣＦにともなう漠然としたＰｌは、あなたまかせの幼児的な生活態度とむすびつき、物事を表面的にのみかんがえたり、抑制力が欠如していることをあらわすこともある。

その他の反応内容で目立つのは、建物反応Ａｒｃｈが全体で４個（ホゴン・リゴマ０個）出現していること、物体反応Ｏｂｊ、インク反応Ｓｔａｉｎ、乗物反応Ｔｒａｖｅｌの出現率がそれぞれ、ホゴン・リゴマを上まわっていることである。ＡｒｃｈとＴｒａｖｅｌは男性的興味や男性的衝動を示し、女性よりも男性に多く生じる内容である。また、Ⅵ図を「十字架」（Ｏｂｊ）、「教会」（Ａｒｃｈ）とこたえたサブジェクトが多く、目をひいた。これはバタンガンのサブジェクトの信仰心のつよさをあらわしているものとおもわ

れる。

（６）　まとめ

バタンガンのサブジェクトには、ホゴン・リゴマのような、不安や緊張状態、抑うつ気分といった圧迫された感情はつよくない。

精神的には、幼児的な軽そう気分や依存欲求がみられる。しかし、ホゴン・リゴマにくらべると精神活動は活発で、生産性もたかい。

環境からの情緒刺激に対する反応はよわくないが、情緒は不安定で、統制できないつよい衝動性がうかがえる。そのため、予測できない行動にはしりやすい。

両親との関係はのぞましくなく、とくに、ホゴン・リゴマとおなじく、父親などのきびしい男性の権威像と適切な関係がもてない。また、性的適応が不十分な点がみうけられる。

知能を実際的、日常的、具体的に用い、どちらかというと、物事を分化して具体的にみることに関心をもつ。また、模倣的で紋切り型の知能を示すことが多く、自分の個性にし

たって行動するよりも、表面的な形式にならおうとし、自発性を欠く。想像力、空想力、洞察力も欠如している。しかし、ホゴン・リゴマのサブジェクトよりは、あたらしい場面や状況を処理する能力がある。

人間、社会関係は、適応しているケースとしていないケースとで、解釈がわかれた。適応している人は、他人や外界に対するあたたかい関心と順応性をもち、外界に見いだした目標にむかって、適切なはたらきかけをすることができる。適応していない人は、社会的相互活動への関心がなく、人間関係をさけたり他人に敵意を有していたりする。なかでも内部に統制されないつよい衝動をもつ人は、その敵意を行動化する恐れがおおきい。また、依存欲求がみたされていない人は、社会的に孤立して不適応感をいだきやすい。

第４章

文化とパーソナリティ

本章では、第３章で測定したホゴン・リゴマ、バタンガン両集落の最頻的パーソナリティと、ブヒッド族の文化変容、社会変化との関連性について考察してみたい。

１　不安、緊張と“フィリピン人”の存在

ホゴン・リゴマの人々にみられる不安や緊張状態は、深刻なロクタノン（低地キリスト教民）との土地紛争や、付近で頻繁におこるＮＰＡ（新人民軍、すなわち共産ゲリラのこと）とＰＣ（フィリピン国軍）の武力衝突に脅かされていることが、その原因だとおもわれる。

先に述べたように、低地民との土地紛争は、かれらにとってもっとも頭のいたい問題であ

る。また、山地に潜伏しているＮＰＡは、不定期的に村をおとずれ、勝手に食糧を“調達”してゆくし、ＰＣはＮＰＡを攻撃するために、空から無差別的に爆弾をおとしている。その無差別攻撃で家をやかれ、奥地の山から移住してきた人々が、ホゴン・リゴマにはかなりいる。かれらは、双方のイデオロギーなどしったことではないので、ＮＰＡも国軍もただ単に、「こわくて迷惑」なものでしかない。かれらが抑うつ的で、圧迫された感情をもっているのも、それらの外的要因によるものではないか。

バタンガンでは、ＮＰＡは村の有力者によって保護され、隠れ家や食糧を提供されるなど、ある程度の支持を得ている。また、バタンガンの人々はその一方で、ＰＣともうまくつきあい、国軍がＮＰＡを“捜索”にくると、ＮＰＡを山奥ににがした上で、ＰＣに家探しをさせるなど、両者の間でうまくたちまわる術を心得ている。

また、村人の土地所有は法的に認められて

おり、ホゴン・リゴマのように土地をめぐって低地民と争う、といったケースは多くない。むしろ、低地民の町でおこなわれるバスケットボール大会や、お祭り、のど自慢などに積極的に参加する姿勢がみられるほどであった。さらに、バタンガンの人々と低地民が結婚をするようになったという事実が、かれらが“フィリピン人”をおそれなくなったことを象徴的にあらわしている。

バタンガンの人々に、ホゴン・リゴマほどの不安、緊張感、抑うつ気分といった圧迫された感情がみられないのは、それら“フィリピン人”とのかかわりかたのちがいによるものであろう。

2　精神の未成熟性と素朴

ホゴン・リゴマ、バタンガンいずれも、幼児的な未成熟性がみられる。たしかに、大人でもビー玉を宝ものにしたり、悪霊の存在を信じてこわがったりと、かれらを子供っぽく

感じる部分はあるが、それは“未成熟”というより、“文明”に対する“素朴”としてとらえられるべきものである。

ロールシャッハ・テストのオーソドックスな解釈では、そのようパーソナリティの特質を、「未成熟」だとか「退行した者」としか表現できない弱点がある。

また、精神活動の活発さは、学校教育や低地民とのつきあいにより、興味の範囲がひろがったバタンガンと、伝統的な慣習にしばられ、生活空間のせまいホゴン・リゴマとでは、おのずからちがってくる。

生産性のちがいは、バタンガンの旺盛な経済活動と、自給自足の生活からぬけだしたばかりのホゴン・リゴマをくらべることで、説明がつくとおもう。

3　不安定な情緒

ホゴン・リゴマ、バタンガンとも、人々の情緒は不安定であるが、情緒刺激をあたえら

れたときの反応のしかたが異なっている。情緒に関しては、かれらの文化的脈絡のなかで説明することが困難なので、ここではふれないでおく。ただ、バタンガンに「統制できないつよい衝動性」がみられるのは、かれらの社会において盗み、傷害などの“犯罪”がみられることと関係があるのかもしれない。

4　父親像（低地民）への恐れ

父親、つまりつよくて支配的な男性の権威像へのおそれは、両者に共通してみられた。ブヒッド族の親子関係をみると、かれらが自分の父親に対して、そのような感情を抱いていることはかんがえられない。この、“つよくて支配的な男性の権威像”というのは、かれらを歴史的に圧迫し、現在も政治、経済的に圧倒的優位にたっている低地民を意味するものとおもわれる。表面上、低地民とうまくつきあっているようにみえるバタンガンにおいても、深層においてはこのような否定的な

感情を抱いていることがよみとれ、興味ぶかい。

ホゴン・リゴマにおいては、父親に対してだけでなく、母親との関係に葛藤がみられる人も多かった。これは、ホゴン・リゴマの離婚率、再婚率がたかいことに原因があるのかもしれない。

経済的無力感は、これも低地民に対して感じているものであろう。流通機構をにぎられ、経済的に搾取をうけているホゴン・リゴマにおいてはとくに、この感情がつよいようだ。

性的無力感は、かれらの社会における、男女比率のアンバランスによって、結婚にあふれた者が感じているとおもわれる。また、ホゴン・リゴマでは、「ロクタノンのボガ（性器）はおおきいが、おれたちのはちいさい」「ロクタノンの女が、おれのボガをたべてしまう」といった話を、本気とも冗談ともつかない顔でする人が多かった。

政治、経済、性事など、あらゆる点において精力的で支配的な低地民に対する恐れは、

予想以上におおきいようである。

5　未開発社会における知能の意味

テストでは、ホゴン・リゴマの人々は、“低知能”だという結果になった。たしかに、日本や欧米の指標でかれらをみれば、知能がひくいということになるだろう。しかし、学校で教わる勉強についてしらなくても、かれらは文明社会の人間とはくらべものにならない豊富な動植物についての知識や、ジャングルで生活を営む上での知恵、そしてアムバハン（詩歌）や、民話などの口承文芸をつくる創造的な能力などを有している。そのようなパーソナリティの側面をはかるには、従来のロールシャッハ・テストの解釈法では限界がある。

一方、バタンガンの人々は、テストの結果をみるかぎり、ホゴン・リゴマほど“低知能”ではない。これは学校教育が施行されていることによるものであろう。また、ホゴン・

リゴマにくらべて、全体反応Wがすくなく、普通部分反応Ddが多いことから、知能を実際的、日常的、具体的に用いると解釈されるが、これは、アメリカの影響によるものではないか。アメリカの場合、日本とくらべてWがすくないことがしられているが、あらゆる面でアメリカの影響下にあるフィリピンの学校教育が、“アメリカ人的なフィリピン人”を育成し、バタンガンにおいてもその兆候がうかがえるとかんがえるのは、飛躍のしすぎだろうか。

ホゴン・リゴマ、バタンガンに共通している「模倣的で紋切り型の知能」は、かれらが大昔から、焼畑農耕民としての素朴なくらしをつづけていることに関係があるようだ。ブヒッド族の社会では、文明社会が通過してきた産業革命はもとより、農業革命でさえも起こり得なかった。このような社会にくらす人々は、加速度的にすすんでいく文明社会の基準からみれば、「模倣的で紋切り型の知能」ということになるのだろう。

なお、バタンガンの人々のほうが、ホゴン・リゴマよりも新しい場面を処理する能力を有するとあるが、これは両者の文化変容や社会変化への対応のちがいをみれば納得できる。ホゴン・リゴマにくらべて、バタンガンの人々のほうが、“開発”に、より積極的で、より柔軟な態度をもって対処していることはあきらかである。

6　社会変化に対する適応の仕方

ホゴン・リゴマで、他人や社会的相互活動への関心がみられないのは、かれらの社会がせまく、人間関係が限定されていることによるものであろう。また、敵意の存在というのは、かれらの日頃の言動から推測すると、低地民に対して抱いている感情だとおもわれる。ただ、かれらは第三者である筆者に愚痴をこぼすことはあっても、低地民にむかってあからさまな抵抗をしめしたり、不平をいったりすることはなく、テストの解釈のとおり、敵

意の感情を抑制しているようであった。

一方、集落が異常ともおもわれるほどのスピードでふくれあがっているバタンガンでは、集落内での人間関係に、低地民との様々な形でのつきあいがくわわり、社会関係が急激に変化している。バタンガンには、それに適応してうまく順応している者と、変化のスピードについていけずに、不適応状態にあるものの両方が存在し、テストにもそれが反映されている。

適応している人間は、政治、経済、教育といったあらゆる分野において、低地民のやりかたを積極的にとりいれ、開発の内的な原動力となって活躍している。その一方で、不適応状態にある者は、土地をもてずに小作人化したり、低地民のもとで下働きしている人が多い。そのような人たちが酒におぼれ、盗みや傷害事件をおこしたり、ブヒッド族の社会規範にはずれるようなことをして村を追放されるといった事件が、最近頻繁におこるようになり、問題となっている。

7　まとめ

以上のように、ブヒッド族の最頻的パーソナリティと、社会変化、文化変容との関連性について考察をおこなった。

まず、ふれておきたいのは、ロールシャッハ・テストの限界についてである。何度も指摘したが、ブヒッド族のような未開発社会においては、オーソドックスな解釈が適用できないケースが多く、難儀した。たしかに、日本や欧米においてでさえ、それぞれの文化的背景によって解釈の仕方がちがってくることがあるのだから、焼畑農耕民のブヒッド族において、一般的な解釈法があてはまらないのは当然である。また、ロールシャッハ・テストの解釈法自体が、科学的な裏付けにとぼしいので、臨床例のないブヒッド族において、その解釈の結果にどれほど信憑性があるのかはわからない。ただ、それらの限界はみとめるものの、実際のテスト結果は、筆者が主観的に観察したブヒッド族のパーソナリティと、

かなりの部分で合致していたことだけはたしかである。

上記の問題点をふまえた上で、「文化変容、社会変化がブヒッド族のパーソナリティにどのような影響をあたえるか」という、研究の主眼について言及してみたい。

具体的な点は第4章の1～6でくわしく記したので省略するが、端的にいうと、未開発の集落（ホゴン・リゴマ）、既開発の集落（バタンガン）いずれにおいても、低地フィリピン人の存在が、かれらのパーソナリティにおおきな影響をあたえている。しかし、その影響のあらわれ方は、両集落のフィリピン人に対する接し方や、開発への対応の仕方のちがいよって、おおきくことなっているといえるだろう。

ここでは、開発の是非について論じることはしないが、ひとつ気になったのは、バタンガンにおける不適応者の存在である。テストをうけてくれた人のなかにも、その後、事件をおこして村をおわれ、行方しれずになった

者がいる。開発にともなう文化変容や社会変化が、本人はもちろん、のこされた家族にとっても、不幸な結果をもたらした、ひとつの例であるといっていいだろう。

バタンガン小学校の子供たち
後列右は筆者

終章

これまで4章にわたって、ブヒッド族の文化変容や社会変化が、かれらのパーソナリティにあたえた影響について考察してきた。序章でかかげた、「統合されてゆく運命にある人々のこころをすこしでも理解する」という目的はある程度達成できたが、「多民族国家における少数民族の教育や開発のあるべき姿」にまでは、かんがえがおよばなかった。機会があれば、今度は別のアプローチによって、この残された課題について論じてみたいとおもっている。

最後に、この研究をまとめるにあたって、いろいろ助言していただいた諸先生方と教育学専攻のみなさん、そして探検部の同輩に、ふかく感謝する。そして、こころよく調査に協力してくださったブヒッド族のみなさんに、感謝の気持ちをこめて、この卒業論文をささげる。

1990年2月　　田村康一

参考文献

綾部恒雄・永積　昭編

1983 『もっと知りたいフィリピン』 弘文堂

菊地　靖　1980 『フィリピンの社会人類学』 敬文堂

メアリー・ラセリス・ホルンスタイナー編

1977 『フィリピンのこころ』 めこん

宮本　勝　1986 『ハヌノオ・マンヤン族』 第一書房

高橋雅春、北村依子編

1981 『ロールシャッハ診断法Ⅰ』 サイエンス社

T.M.アベル　1980 『文化と心理テスト』 サイエンス社

祖父江孝男　1976 『文化とパーソナリティ』 弘文堂

辻　悟・河合隼雄・藤岡善愛・氏原　寛編

1987 『これからのロールシャッハ』 創元社

藤岡善愛　1974 『イメージと人間』 ＮＨＫブックス

1966 「ロールシャッハ・テストによるカラコラム・ナギール領民のモーダル・パーソナリティ」『人間人類学的研究』Ⅵ：181～223　中央公論社

中里　彰　1987 「脱植民地過程における教育の問題」『アジアの文化と教育』pp.151-180 (財)九州大学出版会

KIKUCHI, Yasushi

1984 *Mindoro Highlanders*, New Day Publishers, Quezon City.

LOPEZ, GONZAGA

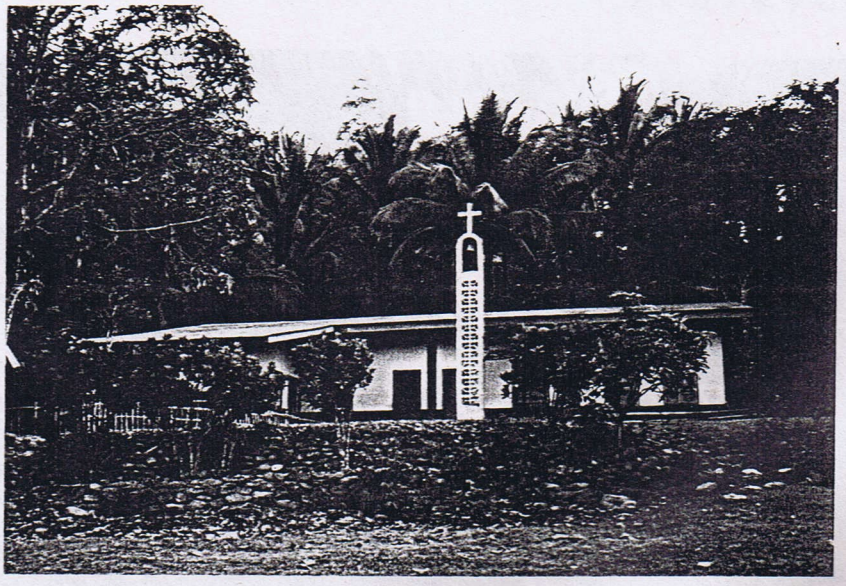
1983 *Peasants in the Hills*, University of the Philippines.

付録

ホゴン・リゴマの人々

バタンガンの人々

バタンガン小学校



カトリックの教会

ブヒッド族の女性

バタンガンにすむ姉妹

カメラをむけると顔をそむけるブヒッド族の女性

ブヒッド族の男性

儀礼用のブタ肉を調理する

奥地にすむ“バゴン”族の言語調査

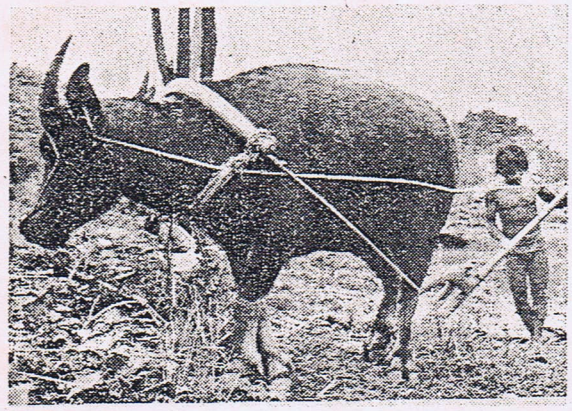
1987年 4月17日　朝日新聞 第2神奈川版

幻のバゴン族と接触？

フィリピン・ルソン島の南に浮かぶミンドロ島で約一カ月半、山岳地帯の探検と原地少数民族の調査を続けていた横浜市立大学探検部（横浜市金沢区瀬戸、田村康一主将、十三人）の一行が、このほど帰国した。

比国ミンドロ島

横浜市大探検部が帰国



水牛を使って農作業するブヒッド族の男性

町へヤシの実を売りに行く

タウ・ブイッド族（上）とブヒッド族の男性

ブヒッド族を調査 女性は腰布で生活

探検隊は、隊長の文理学部三年大槻英二君（三〇）、主将の同、田村康一君（三〇）ら男子学生五人。当初目標としていた、島中央部山腹に住むといわれる〝幻の種族〟バゴン族の調査はできなかったが、バゴン族と思われるナゾの住人との接触には成功した。その後、近くに住み、やはり原始焼き畑農業で生活している種族の集落へ住み込み、約三週間調査をした。

一行はまず、島中央部の海沿いの町ボンガボンへ入り、バコ山ろくから流れ出るボンガボン川を逆上った。最初に立ち寄ったブヒッド族の町バタンガンには教会、学校があり、住人もTシャツや半ズボンをはいていたが、十キロほど内陸の固種族の集落オゴンリゴマやさらに奥のアリットへ入ると、男性は布のふんどし、女性は腰布、という姿が増えた。食べ物もイモ類とバナナがほとんどになった。

五人のうち、田村君ら三人がさらに四十キロほど川を上り、探検したところ、それまでに見たことのない作り方の小屋に、ひげ面、ふんどし姿の男性がいるのを発見した。田村君が近づくと、男は非常に興奮した様子で、牛刀とナタを振り回し、ブヒッド語で話をしても通じなかった。妻と思われる女性もいたが、二人ともすぐ逃げてしまった。

三人が小屋の中に入ると、土器やカエルの干物、細工に使うらしい籐（とう）などがあった。

一行はその後、オゴンリゴマ、アリット、シャギなどの散在集落へ分かれて住み込み、ブヒッド族の焼き畑農業中心の生活を体験調査した。

大槻君は「バゴン族といっしょに住むのには失敗したけれど、接触はできたので満足。後輩たちは、ぜひ友好的に近づき、成功させてほしい」と話している。一行は夏までに探検記録をまとめ、次の探検に備える予定だ。